

## 大阪青山歴史文学博物館所蔵「吉見家文書」の翻刻と解説

小倉 嘉夫<sup>1)</sup>, 倉恒 康一<sup>2)</sup>, 中司 健一<sup>3)</sup>,  
長村 祥知<sup>4)</sup>, 西田 友広<sup>5)</sup>, 目次 謙一<sup>6)</sup>

- 1) 大阪青山歴史文学博物館, 2) 島根県教育庁古代文化センター,  
3) 益田市歴史文化研究センター, 4) 京都府京都文化博物館,  
5) 東京大学史料編纂所, 6) 島根県教育庁古代文化センター

### Reproduction and commentary on the Documents of the Yoshimi Family in the Collection of Osaka Aoyama Museum of History and Literature

OGURA Yoshio<sup>1)</sup>, KURATSUNE Koichi<sup>2)</sup>, NAKATSUKA Kenichi<sup>3)</sup>,  
NAGAMURA Yoshitomo<sup>4)</sup>, NISHITA Tomohiro<sup>5)</sup>, METSUGI Kenichi<sup>6)</sup>

<sup>1)</sup>Osaka Aoyama Museum of History and Literature

<sup>2)</sup>Center for Ancient Culture, Shimane Prefecture

<sup>3)</sup>Center for Studies of the History and Culture, Masuda City

<sup>4)</sup>The Museum of Kyoto

<sup>5)</sup>Historiographical Institute, The University of Tokyo

<sup>6)</sup>Center for Ancient Culture, Shimane Prefecture

**Summary** In this paper, we introduce the Documents of the Yoshimi Family in the Collection of Osaka Aoyama Museum of History and Literature. The Yoshimi Family ruled Tsuwano, Iwami Province, on the Japan Sea coast, in medieval Japan. We reproduced 49 documents of the Yoshimi Family and one related document.

**Keywords:** Yoshimi, Masuda, Mori, Iwami, Tsuwano  
吉見、益田、毛利、石見、津和野

## はじめに

本史料紹介は、大阪青山歴史文学博物館が所蔵する「吉見家文書」全四九点と関連史料一点を翻刻し、紹介するものである。

## 一 大阪青山歴史文学博物館所蔵「吉見家文書」の解説

大阪青山歴史文学博物館が所蔵する「吉見家文書」は、中世の石見国（島根県西部）鹿足郡（吉賀郡とも。島根県鹿足郡津和野町及び吉賀町）を中心に勢力を誇った有力国人領主・吉見氏の家文書である。

系図等によれば、この吉見氏の出自は次のようになる。吉見氏は、源頼朝の弟範頼が武蔵国横見郡吉見荘（埼玉県比企郡吉見町）を領し、その子孫が吉見を称したことに始まる。能登国・石見国などに所領を獲得し、次第に能登を本拠とした系統が有力となる。鎌倉後期に能登吉見氏の一族・頼行が石見国に下向し、吉賀郡木部郷に入り、以後、津和野を本拠に勢力を拡大した。

しかし、以上の歴史については、裏付けとなる史料が全くと言っていいほどなく、能登の吉見氏と石見国の吉見氏が同族であろうこと以外は裏付けがない。

石見吉見氏について史料上確認できるように

なるのは、室町時代前半の応永年間からである。以下、石見吉見氏の歴史を概略したい。

応永年間（一三九四～一四二八）、石見吉見氏は能登の本惣家からの自立を図り、これに成功すると、石見国美濃郡益田（島根県益田市）を本拠とする益田氏と、高津川下流域の長野荘をめぐって争うようになる。両氏の対立は石見西部のみならず、隣国の周防国・長門国（山口県）を中心に西日本に大勢力を誇った大内氏や、大内氏を倒して中国地方西部の覇者となる毛利氏といった大名、大内氏の重臣で益田氏と姻戚関係にある陶氏なども巻き込んで、中国地方西部の政治史に大きな影響を与えた。

応仁・文明の乱に際して、大内氏が東軍方の道頓方と西軍方の政弘方に分裂し、内戦状態に陥った際、吉見成頼が道頓方の主力になると、政弘方の益田貞兼と陶弘護は連携してこれと戦い、道頓を九州に没落させ、吉見成頼は政弘方に降伏した。その後、成頼の子信頼による陶弘護刺殺事件が起こっている。

天文二〇年（一五五一）に陶隆房（のちに晴賢）により大内義隆が廃された際には、益田藤兼は積極的に協力し、周布氏や福屋氏らに陶隆房への協力を呼びかけている。そして、天文二二年末頃から陶氏ら大内氏勢と益田氏による吉見正頼への攻撃が始まる。しかし、翌二三年に

安芸国（広島県）の毛利氏が反陶氏の立場を明らかにすると、陶晴賢は吉見正頼といった和睦し、毛利氏との戦いのため安芸国に転戦した。

しかし、天文二四年の厳島の合戦で陶晴賢が毛利氏に敗れ戦死し、毛利氏が大内氏本国の周防国・長門国に進攻すると、吉見正頼はこれと連携し、弘治三年（一五五七）に大内氏を滅亡させた。

その後、永禄五年（一五六二）までに益田氏から大井や須佐（いずれも山口県萩市）を奪うなど、長門国阿武郡（山口県萩市、阿武郡阿武町及び山口市阿東町）の大半を支配下におさめ、それは毛利氏の周防・長門両国支配の中でも認められ、毛利氏領国の国人領主の中でも重きを占めた。

吉見正頼の子広頼には、元頼と広長の二人の男子があり、元頼は豊臣秀吉の朝鮮侵略（文禄の役）に従軍したが、帰国後の文禄三年（一五九四）に病死したため、広長が跡を継ぐことになった。しかし、広長は素行が悪かったようで、慶長四年（一五九九）に出奔、翌年に許されて帰参するが、慶長九年に再度出奔した。慶長一七年、吉見広頼は吉川広家の次男を婿養子に迎え、吉見政春と名乗らせ、家を継がせた。吉見広長は元和四年（一六一八）に自害に追い込まれている。

吉見政春は周防国熊毛郡に所領を与えられ、熊毛郡大野（山口県熊毛郡平生町）に屋敷を構え、後に毛利就頼と改名し、萩藩の一門家老家である大野毛利家の祖となった。

このように、石見国のみならず中国地方西部の歴史に重要な位置を占める吉見氏であるが、その研究は進んでいるとは言いがたい。その最大の理由は、吉見家文書や関連文書がまとまった形で伝わっていないことにあると思われる。

萩藩が享保年間（一七一六～三六）に家臣の家に伝わる古文書等について報告させ編纂した「閥閥録」には、巻六として毛利伊勢家のものが収録されており、これが大野毛利家に相当するが、収録されている文書の点数は六一点である。これは、同じく石見国の有力な国人領主であった益田氏の巻七益田越中家の二・三・四・五・六・七・八・九・十・十一・十二・十三・十四・十五・十六・十七・十八・十九・二十・二十一・二十二・二十三・二十四・二十五・二十六・二十七・二十八・二十九・三十・三十一・三十二・三十三・三十四・三十五・三十六・三十七・三十八・三十九・四十・四十一・四十二・四十三・四十四・四十五・四十六・四十七・四十八・四十九・五十・五十一・五十二・五十三・五十四・五十五・五十六・五十七・五十八・五十九・六十・六十一・六十二・六十三・六十四・六十五・六十六・六十七・六十八・六十九・七十・七十一・七十二・七十三・七十四・七十五・七十六・七十七・七十八・七十九・八十・八十一・八十二・八十三・八十四・八十五・八十六・八十七・八十八・八十九・九十・九十一・九十二・九十三・九十四・九十五・九十六・九十七・九十八・九十九・百点と比較しても、かなり少ない。また、収録されている文書も、戦国時代以降のものばかりである。

また、益田家については、文書の正文が益田家にまとまって伝わり、現在は東京大学史料編纂所が所蔵し、中世文書だけでも約八〇〇点が現存する。残念ながら吉見家の文書の正文はまとまった形では残らなかった。

さらに言えば、家臣やゆかりの神社仏閣に伝わった文書も、益田氏関係のものが比較的まと

まりよく残っていたのに対して、吉見氏関係のものはまだあまり把握されていない。これについては、今後の課題である。

したがって、先述の吉見氏の歴史は、その多くが「益田家文書」などに拠っている。それは、益田氏の視点から吉見氏を見ることになってしまいうため、やはり吉見氏の視点から吉見氏を考えるためにも、吉見家文書や吉見氏関連文書を博搜することが必要となる。

これまで、吉見家文書の正文については、横浜市立大学に一・四・五・六・七・八・九・十・十一・十二・十三・十四・十五・十六・十七・十八・十九・二十・二十一・二十二・二十三・二十四・二十五・二十六・二十七・二十八・二十九・三十・三十一・三十二・三十三・三十四・三十五・三十六・三十七・三十八・三十九・四十・四十一・四十二・四十三・四十四・四十五・四十六・四十七・四十八・四十九・五十・五十一・五十二・五十三・五十四・五十五・五十六・五十七・五十八・五十九・六十・六十一・六十二・六十三・六十四・六十五・六十六・六十七・六十八・六十九・七十・七十一・七十二・七十三・七十四・七十五・七十六・七十七・七十八・七十九・八十・八十一・八十二・八十三・八十四・八十五・八十六・八十七・八十八・八十九・九十・九十一・九十二・九十三・九十四・九十五・九十六・九十七・九十八・九十九・百点（うち一・二・三・四・五・六・七・八・九・十・十一・十二・十三・十四・十五・十六・十七・十八・十九・二十・二十一・二十二・二十三・二十四・二十五・二十六・二十七・二十八・二十九・三十・三十一・三十二・三十三・三十四・三十五・三十六・三十七・三十八・三十九・四十・四十一・四十二・四十三・四十四・四十五・四十六・四十七・四十八・四十九・五十・五十一・五十二・五十三・五十四・五十五・五十六・五十七・五十八・五十九・六十・六十一・六十二・六十三・六十四・六十五・六十六・六十七・六十八・六十九・七十・七十一・七十二・七十三・七十四・七十五・七十六・七十七・七十八・七十九・八十・八十一・八十二・八十三・八十四・八十五・八十六・八十七・八十八・八十九・九十・九十一・九十二・九十三・九十四・九十五・九十六・九十七・九十八・九十九・百点）が知られていた。

このたび紹介する大阪青山歴史文学博物館所蔵「吉見家文書」四九点は、いずれも正文で、うち四四点が「閥閥録」に収録されているものの原本、五点が新出の文書である。これにより「閥閥録」巻六毛利伊勢家に収録されている文書のうち、原本が把握されていないものは、残すところ四点となった（一・三・三〇・三四・三六号）。

四九点の文書は、卷子四巻に装幀されている。裏書も見えるように装幀されており、状態は非常に良好である。

大阪青山歴史文学博物館所蔵「吉見家文書」

の内容を見ると、戦国時代から江戸時代前半までのもので、大別して室町幕府や門跡寺院に関するものと、毛利氏に関するものがほとんどである。

4・5号からは、室町幕府將軍足利義昭から「名字奉公」が断絶しているため、名代を在京させ、相続するよう求められていることがわかる。足利義植（はじめ義材、次に義尹）に仕えた人物に能登吉見氏と推測される人物がいる。その家系が断絶したため、その相続を求められているのだろうか。

11・13号からは、先述のとおり、吉見氏は益田氏と関係が悪く、そのことについて毛利氏が色々と吉見氏に配慮していること、その際、毛利隆元室や、毛利隆元の娘で吉見広頼室が重要な役割を果たしている様子がわかる。そのようなこともあつてか、元龜二年（一五七一）に毛利隆元の娘が死去すると（14号）、毛利隆元室の兄弟内藤隆春の娘が吉見広頼の後室になっている。

15・17・18号からは、毛利氏周辺の軍事情勢について、多くの情報が得られる。

25・29号からは、中央の寺院から様々な費用負担が求められていることがわかり、興味深い。

35・38号では、吉見広長の素行が問題とされており、ついに吉川広家次男を吉見広頼の娘の

婿とし、家督を相続させるに至る(39～41号)。  
 以上のような、吉見氏の性格を考える上で重要な文書の正文が確認されたことは、吉見氏研究のみならず、中国地方西部の歴史を考察する上でも、その意義は大きい。

## 二 大阪青山歴史文学博物館所蔵「吉見家文書」の翻刻

### 【凡例】

一、字体は、常用漢字や人名用漢字は新字体にあためた。それ以外の漢字(いわゆる表外漢字)や一部の変体仮名には、原文の字体を残したこともある。

一、校訂者の加えた註のうち、校訂註には「」、説明註には( )を用いた。

一、折紙の折り返しは行末に「」で、紙継目は(紙継目)で、欠損で文字数の判別できるものは□で、文字数を判別できない行中のものは「」で、上部のものは「」で、下部のものは「」で、朱書きは『』で、字の抹消は、抹消された文字がわかるものは、のように二重取り消し線で、活字がない字は◆で示した。  
 一、特に注意を要することについては、文書の末尾に○を付して注記した。

一、「閥閥録」との対照関係については、刊本『萩藩閥閥録』の整理番号を付して、文書の末尾に○『閥閥録』五三号または○『閥閥録』なしのように示した。

〔第一巻〕 (1～14号。縦33.6cm)

(題簽)

〔御内書并奉書 乾

御当家御書 正頼代

元春公御状 「

### 1 足利義輝御内書

(切紙。縦19.0cm、横47.8cm。  
 封紙、縦28.5cm、横10.8cm)

先度大鷹事内々

申遣之處、則到来喜

入候、委細申含隆是候、

猶量忠可申候也、

十一月五日 (足利義輝)(花押1)

(封紙ウツ書) 吉見大蔵少輔とのへ

吉見大蔵少輔とのへ

○『閥閥録』五三号

### 2 毛利元就書状(切紙。縦18.4cm、横41.7cm)

就今度門司表敵敗  
 軍、為御祝儀、御太刀

一腰・馬一疋送給候、御

丁寧之儀、畏入候、何様

自是御礼可申入候、猶

御使者申候、恐々謹言、

十一月廿五日 元就(毛利)(花押2)

(正頼) 吉見大蔵大輔殿

參御返報

○『閥閥録』なし

### 3 聖護院道増書状

(切紙。縦18.8cm、横41.3cm。  
 封紙、縦30.1cm、横14.9cm)

今度大内太郎左衛門尉至

防州乱入之處、早速被

討果之由候、殊御粉骨

無比類之旨、其間無隠候、

大慶此事候、公儀御

感悦不浅候、明春者早々

可申述候間令省略候

状如件、

(永禄十二年)(道増)(花押3)

(封紙ウツ書) 吉見大蔵大輔殿

吉見大蔵大輔殿(花押4)

○『閥閥録』二三号

## 4 足利義昭御内書

(切紙。縦 19.6cm、横 51.9cm。  
封紙、縦 27.6cm、横 10.8cm)

聖門准后就被相煩、為

見舞智蔵院罷下候、

惣別名字之儀、當時

断絶候条、為名代在京

可相続事肝要候也、

(元龜元年カ)

(足利義昭)

二月廿六日

(花押5)

吉見大蔵大輔とのへ

(異筆)

「吉見次郎とのへ」

吉見大蔵大輔とのへ

吉見次郎とのへ

○『閥閥録』一四号

○封紙は雲母紙であり、本紙と異なるため、

もとは別の文書のものであった可能性が高い。

## 5 一色藤長・上野信恵連署副状

(切紙。縦 15.8cm、横 48.7cm。  
封紙、縦 24.8cm、横 11.4cm)

就御門跡御煩、為御見舞

智蔵院下向候、仍被成

御内書候、當時御名字奉

公断絶之条、相続候様御

馳走肝要候旨、猶得其意

可申由被仰出候、恐々謹言、

(元龜元年カ)

(上野)

二月廿六日 信恵 (花押6)

藤長 (花押7)

吉見大蔵大輔殿

吉見次郎殿

上野佐渡守

一色式部少輔

吉見大蔵大輔殿 藤長

吉見次郎殿

○『閥閥録』五五号

## 6 足利義昭御内書

(切紙。縦 19.6cm、横 50.3cm。  
封紙、縦 29.1cm、横 14.4cm)

受領事、任

出羽守訖、委細

信恵・藤長可申候

也、

(永祿十二年)

(足利義昭)

三月廿三日 (花押8)

吉見大蔵大輔とのへ

吉見大蔵大輔とのへ

○『閥閥録』二八号

## 7 一色藤長・上野信恵連署副状

(切紙。縦 16.9cm、横 44.5cm。  
封紙、縦 16.3cm、横 11.2cm)

御受領之事、被任出羽守

被成 御内書訖、猶得

其意可申旨被仰出候、尤

御眉目之至候、恐々謹言、

(永祿十二年)

(上野)

三月廿三日 信恵 (花押9)

藤長 (花押10)

吉見大蔵太輔殿

吉見大蔵太輔殿

信恵 藤長

○『閥閥録』二九号

## 8 足利義昭御内書

(切紙。縦 20.5cm、横 48.6cm。  
封紙、縦 29.0cm、横 14.1cm)

阿州逆徒退治儀、対毛利

申遣处、則及請候、然者相談

可励戦功事肝要、次大鷹

若鷹所望候、其辺相尋

於到来者可喜入候、委細者申

含柳沢候、猶兩人可申也、

(元龜二年)

(足利義昭)

九月晦日 (花押11)

吉見出羽守とのへ

吉見大蔵大輔とのへ

吉見出羽守とのへ

吉見大蔵大輔とのへ

○『閥閥録』二一号



## 9 上野信恵・一色藤長連署副状

(切紙。縦16.7cm、横47.4cm。  
封紙、縦23.8cm、横12.2cm)

阿州逆徒御退治之儀、度々

対輝元被仰下事候、然者

被相談可被抽戦功旨 上意候、

次大鷹若鷹御所望候間、

其辺被相尋、於御進上者、可被

悦 思召之由候、仍被成

御内書候、猶得其意可申旨

被仰出候、恐々謹言、

(元龜二年) 九月晦日 藤長 (花押12)

(上野) 信恵 (花押13)

(広頼) 吉見大蔵太輔殿

(正頼) 同出羽守殿

(封紙ウツ書) 一色式部少輔

上野佐渡守

吉見出羽守殿

信恵

○『閔閱録』二二号

## 10 足利義昭御内書

(切紙。縦19.9cm、横46.1cm。  
封紙、縦29.0cm、横12.7cm)

先度茂申遣大鷹之

黄鷹事、近日令所持由

(元政) 柳沢申上間、差下鷹匠候、

此度於到来者最可喜入、

猶元政可申候也、

(足利義昭) 十一月廿四日 (花押14)

(正頼) 吉見出羽守とのへ

(封紙ウツ書) 吉見出羽守とのへ

○『閔閱録』五二号

○本紙と封紙は、もとは別のものか。

## 11 毛利元就・同隆元連署書状

(縦28.1cm、横37.7cm)

追而申入候、就益田之儀、万福寺・

内海罷帰申旨候、只今彼申分、

近比無曲口惜敷候、就夫先々此方

愚意之通申候、何と成共、又御

存分之趣、兩人ニ可被仰聞候、

是茂三筑可得御意候、恐々謹言、

(毛利) 卯月十二日 隆元 (花押15)

(毛利) 元就 (花押16)

(吉見) 正頼 御陣所

○『閔閱録』一号

## 12 毛利元就起請文 (縦26.9cm、横145.1cm)

第四紙は縦25.2cm)

なをく、(益田) ますた申なしにより、われら(別儀)へちき

あるへきとおほしめされ候事、とかく返事申候

(曲) もきよくなく候く、

吉見こゝもとあひたそうせつ候

よし、一日ハよしミひろ頼より

御ふミ見まいらせ候、返事申候つる、又

このたひハ、よしミのかもしよりの御

文見まいらせ候、さてもく、かやう

の事をハいかてい(如何体)のもの申候て、まさ頼・

ひろ頼など御とりあけ候て、かやうにおほ

せられ候事ニて候や、

一そなたさまにも御(存知)そんし候やうに、よしミ

とのひやうり御(表裏)さ候はんとの事ハ、今日

までハわれらなとハうけ給つけす候、

かやうの(雑説)そうせつ申事ハきく申さ

す候、さためてそれさまなどの御ミへも、

入候ましく候と、すもし(推文字)申候、たゝし

(紙継目)

御みへハ入まいらせ候や、うけたまはりたく候、

一すてにへつして御とのものにまいり候て、

けふまでハ、よしミかもしの事も、

ひろ頼御おひいたし候ハて、おかせられ候、

かもしをおかせられ候するあひたハ、この

方にハ、へつしての御とのものと、(存知)そん

し候ハてかなわさる事に候、しかれハ何

事も御心やすく、一へんにたのミ入ま

いらせ候ところに、おりくかやうに

おほせ事にも候あひた、何ともふん(分別)へつ

いたさず候、中へ申へき事もなく候、  
 一よしみの御やうかい、こしらへめされ候とて、  
 こゝもとふしんいたすよしうけ給候、御しやう  
 こしらへめされとも、めされす候とも、そのさた、  
 われくなどへうけたまはりおよはす候、  
 もしくしたくへハさやうの事申候  
 や、そなたさまこそ御そんち候はんすれ  
 とおもひまいらせ候、  
 一うたかひまいらせ候ハ、すわう・なかとへ、  
 たゝ御一人いたしまいらせ候てハ、たのミ申  
 (紙継目)  
 候てハおき申へく候や、中へとかく申  
 へき事もなく候、  
 一ますたより、かやうの事申へたて候はん  
 よしうけ給候、しかれともいわくちいともくちへ  
 いてられ候てのち、しやしやうたゝ一と八さくにつ  
 つかわし候よりほかしやうもまいらせ候ハす候、  
 それさへきつきにみられ候ほとにと申候て、  
 吉かわ所より状をつけ候ハんと申候て、こ  
 の方のつかいハ、まかりこし候ハぬよし候、  
 いことでも、かやうのそうせつをハ、もと就  
 にへうけたまわるましき事、めてたかる  
 へく候、かくのことくよしみの御いへ、もり  
 かせいへ申たんし候うへにて、おほせられ  
 申候へハ、あまりにひきやうなる事にて候まゝ、  
 返事申候もめいわく候、以後ハもと就にハお

ほせきかせられましき事、めてたく存候、  
 それについてほういんのうらにて御ふたりへ  
 申まいらせ候、この状の内、一字もいつわり  
 きよこんの申事候ハ、可罷蒙

(紙継目)

梵天帝釈・四大天王、惣而日本  
 国中大小神祇、八幡大菩薩、  
 殊者嚴島両大明神・祇園  
 牛頭天王之御罰者也、  
 天満大自在天神  
 (元龜元年) 九月四日 元就 (花押 17)

おさき 御つほね  
 (毛利隆元室、内藤興盛女)  
 よしミ御かた  
 御つほねまいる 御返事 申給へ  
 (吉見広頼室、毛利隆元女)  
 (端裏切封ウワ書)  
 (異筆) 元龜元九ノ九ニ到来之」むまの頭  
 おさき 御つほね  
 よしミ御かた  
 御つほねまいる申給へ もと就」

○『閼閼録』二号

13 毛利元就書状(切紙。縦16.1cm、横39.0cm)

御堺目雑説申乱之  
 由承候之条、尾崎局方・  
 津和野御局方江以神文  
 令申候処、重而御懇承候、

得其心候、何ケ度茂此方  
 於悴心底者、最前申入辻候、  
 申茂疎候、加様之雜説  
 無曲候、御心底之儀速令

承知候、恐々謹言、  
 (元龜元年) 九月廿八日 元就 (花押 18)

正頼 御返報  
 広頼

○『閼閼録』三号

14 吉川元春書状

(切紙。縦18.4cm、横117.7cm)

去十三日之御状今日十六  
 到来拝見候、仍其許  
 尾崎御局方不慮之御  
 事不及是非候、御朦氣  
 之段致察計候、自是社  
 先可得御意候之処、吉  
 田尾崎大方不被弁前  
 後、忘却不及沙汰候間、  
 与風罷出、さ様之儀取  
 乱罷成御報、口惜候、我等  
 迄朦氣之段、可被成御  
 察候、広頼之御事者不能  
 申候、御方様御愁傷令察候、  
 殊其砌者閼表御在陳

候歟、御帰城之儀、自吉田

(紙継目)

致在関候者共、口才申、御

打帰之由候、尤奉存候、誠

彼方此方夜白之御辛勞、

御心遣之段、更以無申計候、

来十九日過候者、可被成御

下向之由候、被付御心御懇

意之段、輝元者不及申、我等

まて畏入存候、乍勿論前々

之姿無御忘却、可預御

入魂之由候、誠此段千万

本望存候、自是こそ早々

可被得御意候之处、輝元

備中表之儀付而、中途

出張候条、延引候、口惜候、

於此方之儀者、乍勿論、

別而可被申談候、從最前

御方様元就被仰談、被

得御扶助、被致奉公候之

段、不浅御事候、輝元若輩

之儀候間、是非正頼・広頼

(紙継目)

以御憐愍、吉田之悴家

連続之段、偏奉憑之外

無他候、呉々段々蒙仰

候之通、輝元・隆景(小早川)可申談候、聞

我等事向後猶以得御意、

不可存疎略候、於愚存者

先日常栄寺并兼重左衛門尉

可被得御意候間、令省略候、

恐々謹言、

(元龜二年) 十月十六日 元春(吉川) (花押19)

正頼 参 御返報

○『閥閥録』八号

〔第二卷〕(15～30号)

(題簽)

「御内書并奉書

御当家御書 正頼代

隆景公御状

」 坤

15 毛利輝元書状

(モト折紙カ。縦13.2cm、横89.1cm)

態可申入存候处、

広頼(吉見)ヨリ預御

飛脚候間令申候、

天神山落去

之儀ハ委細

申候キ、作州高田

之事、去十一日

令落去候、於

于今者無殘所

申付候間、可御心安候、

因州之儀、私部

(紙継目)

二三之丸迄仕□(取カ)

之由候、はや可為

一途候、吉左右

追々可申述候、

尚期万慶

候、恐々謹言、

(天正三年) 九月十四日輝元(少輔太郎) (花押20)

正頼参御宿所

○『閥閥録』四号

16 毛利輝元書状

(折紙。縦27.6cm、横45.0cm)

從広頼就預御

状、国右所迄蒙

仰之趣、令承知候、

委曲御報申入候、

次、豊州衆可取出

之由風説候故、從

児周・大加得御

意候哉、別而被付

御心之由、本望之至候、

猶從国右所



可得御意候、恐々

謹言、

右馬頭

七月廿四日輝元(毛利) (花押 21)

正頼(吉見)まいる御陣所

○『閔閔録』なし

### 17 毛利輝元書状 (縦 27.3cm、横 89.0cm)

豊州衆至境目打出之由、從隆春・

仁常所注進之候、最前御父子之

御紙面同前候、然処長野事

松山取付之由候、非無不審候、高橋

与内々宿意共候哉、就其、長野対

此方無別儀候者、隆春被仰談之、

無異儀候様御調干要候、

一因州之儀、先書ニ如申堅固候、

元春事至彼国境陣替候之条、

人数追々差遣之候、縦鳥執一途

候共、雲伯之儀者可御心安候、

一備前面之儀、忍山(備中国)隆景被任

(紙継目)

存分候、此時豊筑及錯乱候者、

吾等・隆景之間可打下候、其内之

儀御抱專一候、

一龍造寺・秋月・長野所江も、切々使

者飛脚被差遣之、様体被聞

合之可蒙仰候、長井・大庭・児周

以下指下申候之条、每事可得御意候、

猶委細含口上候、恐々謹言、

十月廿八日輝元(毛利) (花押 22)

正頼(第一紙切封ウラ書) (墨引) 右馬頭

正頼

廣頼 御宿所

輝元

○『閔閔録』五号

### 18 毛利輝元書状

(切継紙。縦 18.1cm、横 103.0cm)

(端裏切封)

近日者不能書信候、先以

其口之儀無相替事候之哉、

蒙仰度候、松山辺之儀

是又示預之、可得其意候、

一元春陣所馬野山之儀、

山柄可然之条、要害取

構之候、普請等之儀頓

相調候之間可御心安候、

一羽衣石之事、上衆引退候付而

以之外相弱候、随分之者共

日々夜々取退候、無正儀仕

合之由候、然共境目大雪之間、

只今指立及行之儀不相叶候、

可有御察候、

一如此候条、年内之事者、先令

帰陣候、来春者早々可罷出、

(紙継目)

催惣国衆堅固申定候、

元春事者于今伯州境逗

留候、其外方角之国衆茂

同前在陣候、

一南口之儀、忍山(備中国)一着之後者

無別候、可有御到来之間

不能細毫候、

一豊筑之儀、何ケ度申候ても

取々之仕合不及沙汰候、秋・

龍などへも去比差下使僧候、

于今無帰着候、雖然御出陳

之儀候間、御心安候、急度帰城

仕候上者、御注進次第心付候事、

不可存疎候、寒中別而御辛勞、

中々申茂有余候、長筑・大賀・

市伊御用等被仰付候、弥御短

息奉憑候、珍事候者被仰越、

可申入候、猶仏乗坊可申達

(紙継目)

之間不具候、恐々謹言、

十一月卅日輝元(毛利) (花押 23)

正頼

廣頼 御陣所

○『閔閔録』六号

## 19 毛利輝元書状 (縦27.9cm、横88.7cm)

猶々至向後(吉見)広頼、

別而可得御意候間、

御同前候様、可被仰与

(以下、行間)  
事、可為本望候へ、

以兩人御内意蒙仰

之通、具令分別候、一々

無余儀存候、誠二別而

御入魂之至、不可致忘却候、

今度被成 御上、預

御届候儀、旁以難申

尽候間、委細此者任

口上候、何茂明日小田へ

(紙継目)

以使者可申述候、恐々謹言

六月七日 輝元(毛利) (花押24)

(第一紙奥切封ウツ書)  
「(墨引)

(異筆)  
「天正十年

六月七日到来」

(吉見)  
正頼 参人々申給へ 輝元」

○『閏閏録』九号

## 20 足利義昭御内書

(切紙。縦21.5cm、横47.5cm。

封紙、縦29.4cm、横12.3cm)

其表着陳辛勞之由(陣)

申遣处、為礼差越

同名安房守、太刀一腰・

鵜眼万足到来、

喜入候也、

(天正五年)  
十月廿日 (足利義昭) (花押25)

(廣頼)  
吉見大蔵大輔とのへ

(封紙ウツ書)  
「吉見殿」

○『閏閏録』二〇号

## 21 真木島昭光副状

(切紙。縦17.0cm、横51.3cm)

(端裏切封)  
「(墨引)」

(陣)  
就御在陳之儀、被指

越御使处、為御礼以

同名安房守被申入、

御太刀一腰・鵜目万足

御進上、令披露候、仍被

成 御内書候、得其意、

能々可申由、被仰出候、

恐々謹言、

(天正五年)  
拾月十九日 昭光(真木島) (花押26)

(廣頼)  
吉見大蔵太輔殿

○『閏閏録』六一号

## 22 足利義昭御内書

(切紙。縦21.0cm、横48.2cm。

封紙、縦25.9cm、横13.8cm)

去年以来、於下口尽粉骨由、

尤神妙、此節一人父子至当表

令出陳、輝元(毛利)同前可馳走事、

弥以可為喜悅、仍肩衣袴遣之、

委細相含雲龍軒、猶昭光可申候也、

(天正五年)  
八月十二日 (足利義昭) (花押27)

(廣頼)  
吉見大蔵大輔とのへ

(封紙ウツ書)  
「吉見大蔵大輔とのへ」

○『閏閏録』一八号

## 23 真木島昭光副状

(切紙。縦17.1cm、横50.1cm。

封紙、縦27.3cm、横10.8cm)

去年以来、下口被遂在陣、

御粉骨之由、被 聞食候、最

以被思召神妙之通、被成

御内書候、仍 御肩衣袴

御拝領之候、弥此節輝元(毛利)

被相談、一人父子至当表

被馳上、諸事御馳走、

可為 御喜悅旨、得其意、

能々可令申由、被仰出候、

委細雲龍軒可被申達候、

恐々謹言、

(天正五年)  
八月十二日 昭光(真木島) (花押28)

吉見大藏太輔殿

〔封紙ウラ書〕

真木島玄蕃頭

吉見大藏太輔殿

昭光

○『閔閔録』一九号

## 24 小早川隆景書状

(切紙紙。縦17.8cm、横66.3cm)

先日者及兩度御使札、御懇意之至□入候、御所勞此節之趣、被仰聞度候、定次第ニ可為御快驗と存候、去比以来為御見舞ニ

使等可進置之處、御上使衆上国、彼是ニ每事

不待寸晦、兎角無音之

仕合、御心中致迷惑候、

雖不及申候、無御油断御

養生肝要□、於肥後表之

儀者〔吉見〕可被仰達候、

〔毛利〕輝元爰度上洛ニ付而、

拙者事茂□者罷上候、

上辺隙明次第、懸而可

(紙継目)

致下向候、余無沙汰罷成候間、卒度申入候、次御太刀一腰・青銅三千疋令進

入候、寔表書音計候、

猶々吉事可得御意候、

恐々謹言、

〔天正十六年〕

〔小早川〕

〔吉見〕

正頼 人々御中

○『閔閔録』なし

## 25 某直状

(切紙。縦21.0cm、横50.3cm。封紙、縦30.2cm、横11.7cm)

就元三大師会場

之儀、被成 勅裁候、

早遂造功之節者、

可為 叡感候、委曲

藤本坊可申候也、

八月廿三日(花押30)

吉見殿

〔封紙ウラ書〕

「吉見殿江」

○『閔閔録』四九号

## 26 某副状

(切紙。縦21.4cm、横50.4cm。封紙、縦30.0cm、横11.4cm)

就元三大師会場之儀、

勅裁如斯候、造営之

助力於入魂者、可為

叡感候、併毎年齋会之

紹隆、且者末代之名譽、

武運之増進、懇祈不可

過之候、猶藤本坊法印

可申候也、

八月廿三日(花押31)

吉見殿

〔封紙ウラ書〕

〔異筆〕

吉見殿江

○『閔閔録』五一号

## 27 青蓮院尊朝法親王直状

(切紙。縦21.3cm、横42.6cm)

御修法灌頂之儀、于今令延引候、

此砌以馳走遂其

節候者、可悅入候、併可

為武運長久之祈禱候、

猶妙音院可申候也、

八月五日(花押32)

吉見とのゝ

○『閔閔録』四七号

## 28 青蓮院尊朝法親王直状

(切紙。縦22.2cm、横48.7cm。封紙、縦29.1cm、横10.2cm)

天台座主拝任之

事候、宣命之

儀、遂其節候様、

於馳走者、可悦入候、

併可為武運長

久之祈禱候也、

九月三日 (花押33)

吉見とのゝ

「吉見殿江」

○『閥閥録』四八号

## 29 東大寺宗持院快円・無量寿院訓芸連署書状

(切紙。縦22.4cm、横47.3cm。

封紙、縦30.4cm、横10.5cm)

久不啓案内候、海岸遙相

隔故、無音更非疎意候、仍而

油煙拾挺進入候、表御音信迄候、

随而浮米之儀、早速御勘渡、

尤可為畏悦之旨、満寺集

会評議候、恐々謹言、

六月十八日 快円 (花押34)

無量寿院 訓芸 (花押35)

吉見殿

「封紙ウツ書」

東大寺満寺衆徒等

吉見殿

訓芸

○『閥閥録』五〇号

## 30 聖護院道澄書下

(切紙。縦18.3cm、横51.5cm。

封紙、縦30.3cm、横13.9cm)

珍札尤本望之至候、

仍太刀一腰金覆輪・馬

一疋到来、令祝着候、

至向後者、切々可得芳意候

条、於同意者可為喜悦候、

猶重而可申述候間、不能

詳候也、状如件、

六月十一日 (道澄)

吉見大蔵大輔殿

「封紙ウツ書」

吉見大蔵大輔殿 (花押37)

○『閥閥録』五四号

〔第三卷〕(31～44号)

(題簽)

「御当家御書

広頼代 坤

隆景公御返翰

元頼エ

□川家ヨリ書翰

広長エ

## 31 毛利輝元書状 (縦30.8cm、横47.3cm)

「端裏捺封ウツ書」

「(墨引) 広頼まいる 輝元」

明日御下向之由、尤可

然候、随分御養生肝要候、

仍両種送給候、祝

着之至候、則賞翫此事候、

猶自是可申候、恐々謹言、

卯月廿五日 輝元 (花押38)

○『閥閥録』三九号

## 32 毛利輝元書状 (折紙。縦32.0cm、横49.4cm)

御下之後不令申候、

久々御辛勞、定而

可為窮◆候、仍

十日上洛儀定候処、

大仏之木肝要ニ

被思召候条、今少

相延之、可致其調

之旨 御下知候間、

其分ニ候、然者其地

木之儀如何候之哉、

備中之材木不出ニ

相すミ候、如此之時者

尚以其表之儀專」

用意候間、別而御

肝煎頼入候、毎

事御短息之趣、

入与三可申候、恐々謹言、

五月八日 輝元 (花押39)

吉見三河守殿

○『閥閥録』三七号

## 33 毛利輝元書状(折紙。縦28.5cm、横43.2cm)

御一人之事令

申候之處、早々

被差出之候、就今

度上洛之儀、申

談之題目候、頓

御馳走可為祝

着候、於 様子は

従各所可申候、次

分国法度之

条々申入候、御分

別簡要候、恐々

謹言、

右馬頭(毛利)

六月十五日輝元(花押40)

(吉見)  
広頼 御宿所

○『閥閥録』三八号

## 34 小早川隆景書状

(切紙。縦19.7cm、横47.6cm)

追而御札令拝見候、

仍葉茶壺被懸御

意候、誠驚目候、一廉

之御道具、御芳志

過分之至、連々可致

秘藏、猶御使者申

入候、恐々謹言、

六月廿一日 隆景(小早川)(花押41)(吉見)  
広頼 参 御返報

○『閥閥録』四六号

## 35 毛利輝元書状(折紙。縦26.9cm、横41.4cm)

さい相事やかてくたり

申へく候、われくハ九月二

かハリ候てくたり

(以下、行間)  
申へく候、われく

ふんにて申

へく候へ共、ちと

かいけ心に候まゝ

かくのことくに候、

(分別)

御ふんへあるへく候、かしく

(毛利秀元)  
さい相へながとのくに(吉見)  
つかハし候、さ候へハよしミ(領)(多分)  
れうたふん御さ候、しかる(吉見広頼)(萩)  
あひた、ひろ頼はきニ(名代)  
御さ候て、めうたいにて、(役目)  
なかつのやくめをひてもとへ(毛利秀元)  
めされてしかるへく候、(石見)  
いわミの御れうふん(領分)  
やくめの儀を、この方へ(吉見広長)  
めうたいにてめさるへく候、(吉見)  
長二郎の儀、心もち

とき申たんすへく候、

(両方)  
りやうはうへのやくめ、(儀)  
太きに申するへく候

へ共、けんしゆつをあけ

(国替)  
られ候ハて、くにかへにも

あわれ候ハて、大かちにて

(手前)  
候、われくてまへの事ハ、(無給)(同然)  
むきうとうせんニまかり(諸)  
成候、しよ人のあんと(安堵)  
させ、われくてまへをは、

つかまつりつめ候て、ある

事にて候、是にて御ふ

んへつあるへく候、

(分)  
人のうへにハ十ふん

なる事ハなき事

にて候、身にかへ候て人を

(委細)  
いたわり申候まゝ、この(毛利元康)  
うへハ申事なく候、いさいハ(毛利)  
もとやすより申さる

へく候、その御心之候へく候、尚々、かしく

(毛利)  
六月九日 てる元(毛利元康室、吉見広頼女)  
やのさままいる人々申給へ

○『閥閥録』四四号

## 36 宗瑞(毛利輝元)書状

(縦31.5cm、横44.1cm)



〔端裏検封ウツ書〕  
「（墨引） 吉見三河守殿□□□ 宗瑞」

此比御手前不相成之由候、  
誠左少之儀候へ共、八木百石  
進之候、御志計候、猶此者  
可申候、恐々謹言、

卯月一日 宗瑞（毛利輝元）  
（花押42）

○『閥閥録』四〇号

○端裏書の欠損部分は、「閥閥録」により補  
った。

37 宗瑞（毛利輝元）書状

（折紙。縦32.8cm、横49.7cm）

兩人所迄

早々承、祝

着申候、太風

之剋、上閥

宿ニ居候て、少も

氣遣無之候

ツ、可御心安候、

やかて下向

候て、可申

承候く、恐々」

謹言、

八月廿五日 宗瑞（毛利輝元）  
（花押43）

吉三州御返

○『閥閥録』四一号

38 宗瑞（毛利輝元）書状（縦31.5cm、横93.8cm）

尚々、長二今之分之心持にてハ

無曲候間、御異見肝心候、若家

中之者之儀付而、不被差置被

（以下、行題）  
申分候ハ、是又聞届、

可令談合候、委細やの

より可被申候、

（毛利元康室、吉見広頼女、吉見広長）  
やのつほねかた長二郎殿

半之儀、自御方御異

見候処、長二ふと在所被

罷帰之由、九郎左衛門尉物語

候、無心元候、幸御方

爰元御出事候間、長二

被罷出候共、又在所より成

とも、所存被申越候様

御心遣肝要候、正頼・元就

以來別而被申談筋

目無忘却候間、爰を以

（紙継目）

御分別專一候、為此申候、

恐々謹言、

十一月七日

（第二紙奥切封ウツ書）  
「（墨引） 宗瑞（毛利輝元）  
（花押44） 幻庵

（吉見広頼、三河守）  
吉三州まいる申給へ 宗瑞」

○『閥閥録』四二号

39 宗瑞（毛利輝元）・毛利秀就連署宛行状

（縦40.0cm、横65.0cm）

御方息女之儀、広家次男江申合、

可有相続之通聞届候、自然有不和

之儀、離別候者、千百三拾九石余地

打渡辻之儀者、勿論右之息女可

有裁判者也、仍如件、

慶長拾七年十二月十三日宗瑞（毛利輝元）  
（花押45）

秀就（毛利）  
（花押46）

吉見三河守殿

○『閥閥録』三二二号

40 宗瑞（毛利輝元）・毛利秀就連署裁許状案

（縦35.5cm、横62.5cm）

御方次男彦次郎江広頼息女嫁

宿候而、彼跡目可有相続之段承知候、

千百参拾九石余地打渡之前、全領

知候而、役儀不可有油断候、自然不和

之儀候而、於離別者、知行之儀者

女子江可被返与者也、仍状如件、

慶長拾七年十二月十三日宗瑞（毛利輝元）

秀就（毛利）

吉川藏人殿

○『閥閥録』三三三号

## 41 吉川広家・吉川広正・吉見彦次郎連署起請

文 (縦35.5cm、横52.8cm)

(吉見政春)

就彦次郎儀、以 御父子様御詫、御契約ニ

御神文并御家中衆御墨付致拜見、忝

存候、然者向後之儀、対貴殿様聊余儀御

座有間敷候、此旨於偽者、

梵天帝釈四大天王、惣而日本国中大小

神祇、嚴島両大明神、殊八幡大菩薩

南無天満大自在天神可罷蒙 御罰

之者也、仍神文如件

慶長拾七年十二月十三日

吉川藏人

広家 (花押47)

同又次郎

広正 (花押48)

吉見彦次郎

吉見三河守殿

○『閔閱録』なし

## 42 宗瑞 (毛利輝元) 書状

(縦31.3cm、横49.0cm)

(端裏捺封ウツ書)

(吉見広頼、三河守)

「(墨引) 吉三州まゐる申給」 宗瑞

近日ハ余取紛候而

無音、所存外候、仍任

見来兩種令

進之候、尚々期面

上候、恐々謹言

十二月十九日宗瑞 (花押49)

○『閔閱録』四三号

## 43 毛利輝元書状 (縦31.0cm、横47.5cm)

去正月廿六於京都大明人

(漢城府)

執懸防戦之砌、頸一被討捕

之由、誠粉骨之次第令

祝着候、猶元康可被申候、

恐々謹言、

六月三日 輝元 (花押50)

(文禄二年)

(元頼)

吉見次郎兵衛尉殿

○『閔閱録』七号

## 44 宗瑞 (毛利輝元) 書状

(縦33.6cm、横50.2cm)

(端裏捺封ウツ書)

(吉見広長)

「(墨引) 吉大蔵まゐる」

從広頼、尊円之

古今集給候、別而

自愛此事候、当

時稀候、面談之通

能々可被申達候、恐々

謹言、

七月十一日 宗瑞 (花押51)

(毛利輝元)

○『閔閱録』四五号

〔第四卷〕(45、49号)

(題簽なし)

## 45 毛利輝元官途書出 (縦39.6cm、横59.6cm)

任 次郎兵衛尉

文禄二年六月三日

(毛利輝元)

文禄二年六月三日 (花押52)

吉見次郎殿

○『閔閱録』なし

## 46 毛利秀就受領書出 (縦39.8cm、横64.5cm)

受領

阿波守

寛永三年十二月十三日

(毛利)

秀就 (花押53)

(政春)

○『閔閱録』一〇号

## 47 毛利秀就書状 (縦33.4cm、横50.3cm)

(端裏捺封ウツ書)

「(墨引) 毛利右京進殿

まゐる申給」 長門

御方名字之儀、任同

名候而、名乗就進之候

之間、可被得其意候、恐々

謹言、

三月廿日 秀就 (花押54)

(毛利)

○『閔閱録』三五号

## 48 毛利秀就官途・実名書出

(縦40.6cm、横61.7cm)

任 織部佑

就

寛永貳拾年正月朔日秀就<sup>(毛利)</sup> (花押55)毛利鬼之介殿<sup>(就詮)</sup>

○『閥閥録』一一号

## 49 毛利吉元受領・実名書出

(縦40.6cm、横60.3cm)

可為

阿波

元

正徳四年六月十九日

吉元<sup>(毛利)</sup> (花押56)  
毛利萬之助殿<sup>(元直)</sup>

○『閥閥録』一二号

(参考) 大阪青山歴史文学博物館所蔵文書

## 1 吉見正頼書状 (縦17.9cm、横46.2cm)

就彼是取乱ニ、毎事

無沙汰申候処、遠路御音

信、殊兩種送給候、一入

祝着存候、何比御下向候哉、

我等儀近日可罷下候間、

自然御下候者、彼表以面可

申述候、恐々謹言、

九月四日

正頼<sup>(吉見)</sup> (花押57)

棕神五郎殿御返事

(モト封紙ウツ書カ)

吉見

棕神五郎殿御返事 正頼

おわりに

翻刻にあたっては細心の注意を払ったが、誤りがあることを恐れる。諸賢の高覧・批判を乞うとともに、本史料紹介が吉見氏研究、ひいては中世史研究に活用されるならば、望外の喜びである。

註

1) 福田以久生「横浜市立大学図書館所蔵文書について(その三、吉見文書)」(『横浜市立大学論叢』三〇、人文科学系列二一三、一九七九年)。「山口県史」史料編中世二(二〇〇一年)。

2) 翻刻に示したように、各巻子の題簽によると、第一巻が「正頼代乾」、第二巻が「正頼代坤」、第三巻が「広頼代坤」となっていることから、「広頼代乾」の巻子の存在が想定される。第四巻は題簽がないが、その内容から「広頼代乾」の可能性は低い。

横浜市立大学所蔵の「吉見家文書」は、「御内書并奉書」の題簽があり、差出別に見ると、足利義昭四点、その側近ら七点、毛利輝元一点、浄円(一色氏)一点、劉雲軒了榮(原田隆兼)一点、宛所別に見ると、正頼宛が八点、広頼宛が四点であり、正頼宛のものが多く、広頼が当主である時期のものと考えることができ、表「広頼代乾」の可能性はある。ただし、表

紙の裂<sup>きれ</sup>の模様が大阪青山歴史文学博物館のものとは異なっている。

また、田布施町の個人所有にかかる「吉見家文書」(『山口県史』史料編中世二所収)は、巻子二巻に装幀されている。その第二巻に収録されている中世文書は吉見氏との関連が不明なものであるため、「広頼代乾」の可能性は低い。

一方、第一巻は、差出別に見ると、小早川隆景二点、毛利輝元四点、大内政弘、吉川元長、佐世元嘉が各一点、宛所別に見ると、成頼宛一点、正頼宛二く三点、広頼宛が五く六点であり、やはり「広頼代乾」の可能性はある。装幀の裂の模様は、大阪青山歴史文学博物館のもの、横浜市立大学のもの、いずれとも異なる。

「広頼代乾」が上記のいずれかなのか、それともまた別にあるのか、現時点では確定できないが、「吉見家文書」の構成を考える材料として整理しておく。

付記

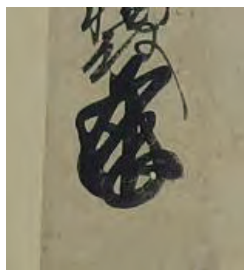
本史料紹介は、二〇一八年度東京大学史料編纂所一般共同研究「中世石見国高津川流域の史料調査と研究」(研究代表者…中司健一)の成果の一部である。

【表1】大阪青山歴史文学博物館所蔵「吉見家文書」及び関連文書目録  
兼、横浜市立大学図書館所蔵「吉見家文書」も含めた「閤関録」との対照表

	文書名	閤関録 No.	卷子 No.	卷子内 No.	法量 (cm)						注記
					縦	横	一紙	二	三	四	
1	足利義輝御内書	53	1	1	19.0	47.8	47.8	—	—	—	封紙：縦 28.5 横 10.8
2	毛利元就書状	—	1	2	18.4	41.7	41.7	—	—	—	
3	聖護院道増書状	23	1	3	18.8	41.3	41.3	—	—	—	封紙：縦 30.1 横 14.9
4	足利義昭御内書	14	1	4	19.6	51.9	51.9	—	—	—	封紙：縦 27.6 横 10.8
5	一色藤長・上野信恵連署副状	55	1	5	15.8	48.7	48.7	—	—	—	封紙：縦 24.8 横 11.4
6	足利義昭御内書	28	1	6	19.6	50.3	50.3	—	—	—	封紙：縦 29.1 横 14.4
7	一色藤長・上野信恵連署副状	29	1	7	16.9	44.5	44.5	—	—	—	封紙：縦 16.3 横 11.2
8	足利義昭御内書	21	1	8	20.5	48.6	48.6	—	—	—	封紙：縦 29.0 横 14.1
9	上野信恵・一色藤長連署副状	22	1	9	16.7	47.4	47.4	—	—	—	封紙：縦 23.8 横 12.2
10	足利義昭御内書	52	1	10	19.9	46.1	46.1	—	—	—	封紙：縦 29.0 横 12.7
11	毛利元就・同隆元連署書状	1	1	11	28.1	37.7	37.7	—	—	—	
12	毛利元就起請文	2	1	12	26.9	145.1	38.6	37.8	37.2	31.5	第4紙神文は縦 25.2
13	毛利元就書状	3	1	13	16.1	39.0	39.0	—	—	—	
14	吉川元春書状	8	1	14	18.4	117.7	40.0	45.2	32.5	—	
15	毛利輝元書状	4	2	1	13.2	89.1	43.6	45.5	—	—	
16	毛利輝元書状	—	2	2	27.6	45.0	45.0	—	—	—	
17	毛利輝元書状	5	2	3	27.3	89.0	43.8	45.2	—	—	
18	毛利輝元書状	6	2	4	18.1	103.0	45.0	44.3	13.7	—	
19	毛利輝元書状	9	2	5	27.9	88.7	43.7	45.0	—	—	
20	足利義昭御内書	20	2	6	21.5	47.5	47.5	—	—	—	封紙：縦 29.4 横 12.3
21	真木島昭光副状	61	2	7	17.0	51.3	51.3	—	—	—	
22	足利義昭御内書	18	2	8	21.0	48.2	48.2	—	—	—	封紙：縦 25.9 横 13.8
23	真木島昭光副状	19	2	9	17.1	50.1	50.1	—	—	—	封紙：縦 27.3 横 10.8
24	小早川隆景書状	—	2	10	17.8	66.3	42.9	23.4	—	—	
25	某直状	49	2	11	21.0	50.3	50.3	—	—	—	封紙：縦 30.2 横 11.7
26	某副状	51	2	12	21.4	50.4	50.4	—	—	—	封紙：縦 30.0 横 11.4
27	青蓮院尊朝法親王直状	47	2	13	21.3	42.6	42.6	—	—	—	
28	青蓮院尊朝法親王直状	48	2	14	22.2	48.7	48.7	—	—	—	封紙：縦 29.1 横 10.2
29	東大寺宗持院快円・無量寿院訓芸連署書状	50	2	15	22.4	47.3	47.3	—	—	—	封紙：縦 30.4 横 10.5
30	聖護院道澄書下	54	2	16	18.3	51.5	51.5	—	—	—	封紙：縦 30.3 横 13.9
31	毛利輝元書状	39	3	1	30.8	47.3	47.3	—	—	—	
32	毛利輝元書状	37	3	2	32.0	49.4	49.4	—	—	—	
33	毛利輝元書状	38	3	3	28.5	43.2	43.2	—	—	—	
34	小早川隆景書状	46	3	4	19.7	47.6	47.6	—	—	—	
35	毛利輝元書状	44	3	5	26.9	41.4	41.4	—	—	—	



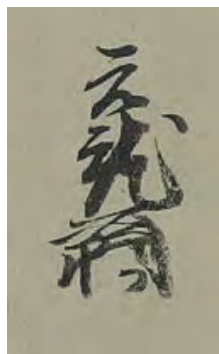




4. 道増



3. 道増



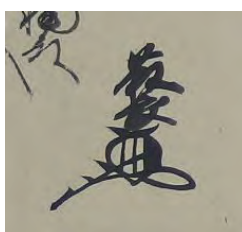
2. 毛利元就



1. 足利義輝



8. 足利義昭



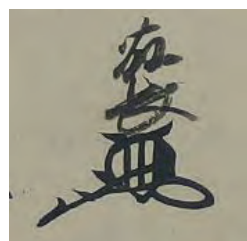
7. 一色藤長



6. 上野信恵



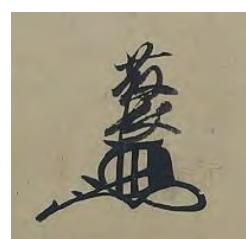
5. 足利義昭



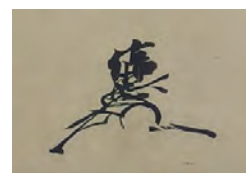
1 2. 一色藤長



1 1. 足利義昭



1 0. 一色藤長



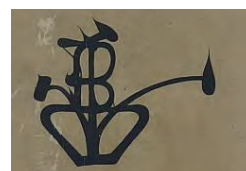
9. 上野信恵



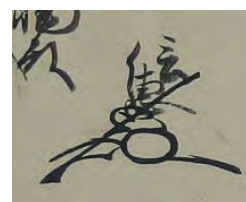
1 6. 毛利元就



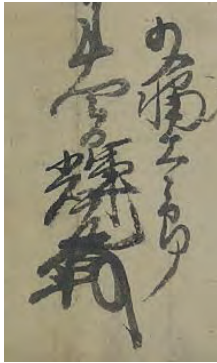
1 5. 毛利隆元



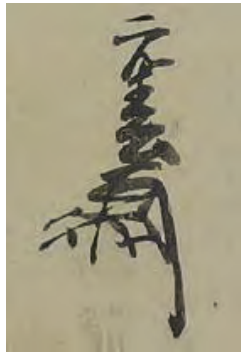
1 4. 足利義昭



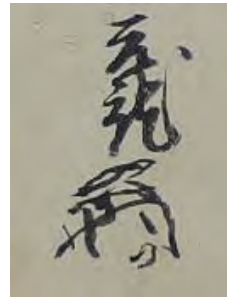
1 3. 上野信恵



20. 毛利輝元



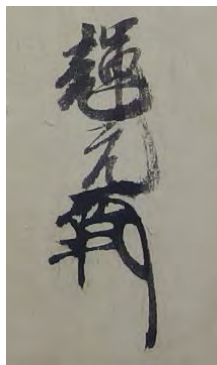
19. 吉川元春



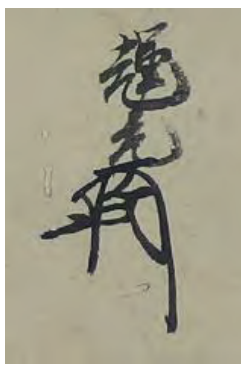
18. 毛利元就



17. 毛利元就



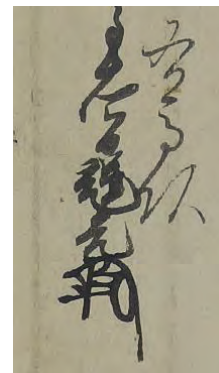
24. 毛利輝元



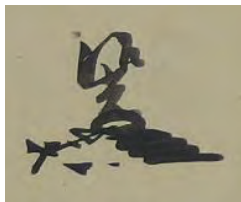
23. 毛利輝元



22. 毛利輝元



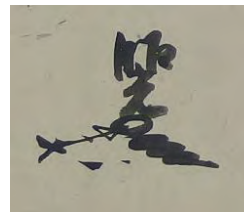
21. 毛利輝元



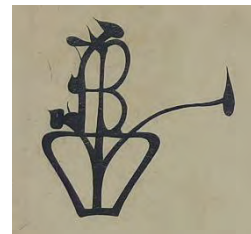
28. 真木島昭光



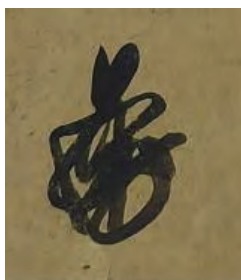
27. 足利義昭



26. 真木島昭光



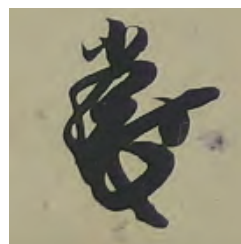
25. 足利義昭



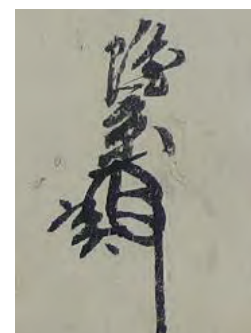
32. 尊朝



31. 某



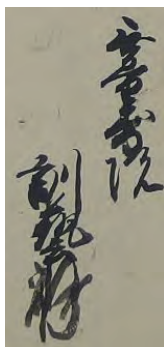
30. 某



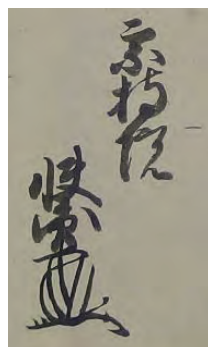
29. 小早川隆景



36. 道澄



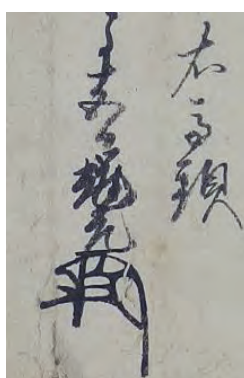
35. 訓芸



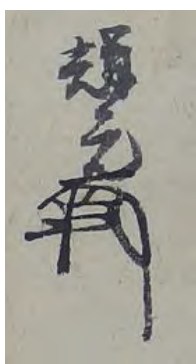
34. 快円



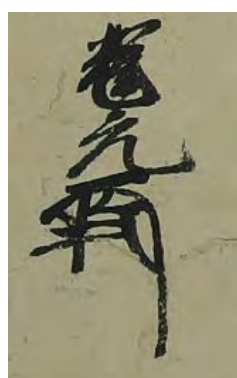
33. 尊朝



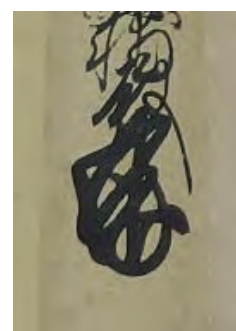
40. 毛利輝元



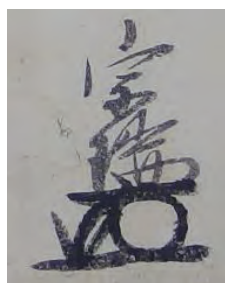
39. 毛利輝元



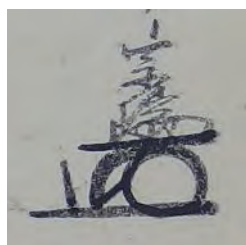
38. 毛利輝元



37. 道澄



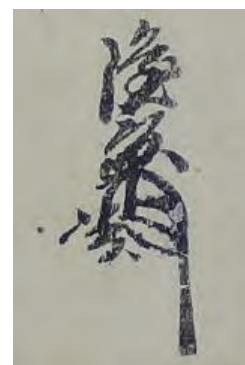
44. 宗瑞  
(毛利輝元)



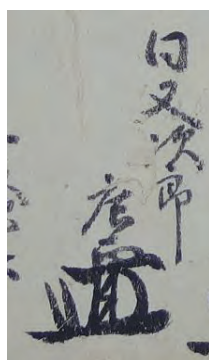
43. 宗瑞  
(毛利輝元)



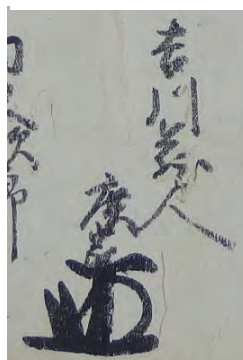
42. 宗瑞  
(毛利輝元)



41. 小早川隆景



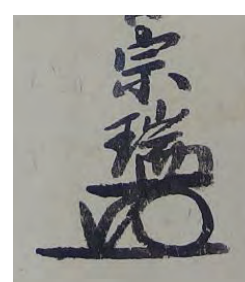
48. 吉川広正



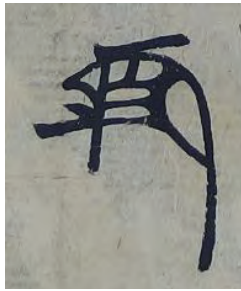
47. 吉川広家



46. 毛利秀就



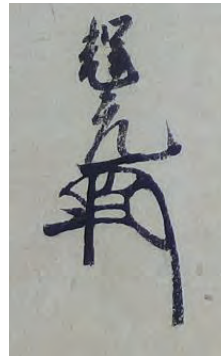
45. 宗瑞  
(毛利輝元)



5 2. 毛利輝元



5 1. 宗瑞  
(毛利輝元)



5 0. 毛利輝元



4 9. 宗瑞  
(毛利輝元)



5 6. 毛利吉元



5 5. 毛利秀就



5 4. 毛利秀就



5 3. 毛利秀就



5 7. 吉見正頼